

平成 30 年度 異常気象分析検討会（定例会）議事概要

1. 開催日時

平成 31 年 3 月 11 日（月） 15:00～17:00

2. 開催場所

気象庁講堂

3. 出席者

別紙 1 のとおり。

4. 議題及び検討結果の概要

下記の議題について検討を行った。

（1）今年度の活動報告と来年度の計画について

平成 30 年度の活動報告に続き、平成 31 年度の活動計画について検討を行い、了承された。なお、今後の検討会の活動への参考のため、平成 30 年 7 月豪雨と猛暑の事例に対して、現象発生から 8 月 10 日の臨時会開催までの経過や関係者間の連携、情報提供、成果の発表等について振り返り、議論を行った。

（2）2018/2019 年冬の大気循環場の特徴

2018/2019 年冬の日本の天候と大気循環場の特徴について検討を行い、その結果を別紙 2 のとおりとりまとめた。

平成 30 年度 異常気象分析検討会（定例会） 出席者

異常気象分析検討会 委員

- ◎ なかむら ひさし 中村 尚 東京大学先端科学技術研究センター 教授
- むこうがわ ひとし 向川 均 京都大学大学院理学研究科 教授
- いわさき としき 岩崎 俊樹 東北大学大学院理学研究科 特任教授
- きもと まさひで 木本 昌秀 東京大学大気海洋研究所 教授
- たかやぶ いずる 高薮 出 気象研究所 研究総務官
- たかやぶ ゆかり 高薮 縁 東京大学大気海洋研究所 教授
- たにもと よういち 谷本 陽一 北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
- ひろおか としひこ 廣岡 俊彦 九州大学大学院理学研究院 教授
- わたなべ まさひろ 渡部 雅浩 東京大学大気海洋研究所 教授

(◎：会長、○会長代理、敬称略、会長・会長代理以外は五十音順)

かわむら りゅういち (川村 隆一 九州大学大学院理学研究院 教授、ますもと ゆきお 升本 順夫 東京大学大学院理学系研究科 教授は欠席。)

気象庁

地球環境・海洋部長、地球環境業務課長
気候情報課長、エルニーニョ情報管理官、予報官
異常気象情報センター所長、予報官
海洋気象課長、海洋気象情報室長、環境気象管理官
関係官

2018/2019 年冬の天候と大気循環場の特徴のまとめ

(日本と世界の天候)

- 東日本以西では冬の平均気温がかなり高く、特に沖縄・奄美は記録的な暖冬となった。
- 北・東・西日本の日本海側の冬の降雪量はかなり少なく、西日本日本海側は記録的な少雪となった。
- 冬の降水量は、北・東日本で少なく、沖縄・奄美で多くなった。
- 世界でも顕著な低温や大雪、または顕著な高温となった地域がみられた（カナダから米国北部の寒波（1月下旬～2月）、オーストラリアの高温（12～1月））。

(日本の天候と大気の流れ)

- ① 北大西洋北部において、上層の高気圧性循環偏差が持続し、ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流の大きな蛇行を励起した。この影響により、東シナ海付近では上層の高気圧性循環偏差となり、偏西風は北に蛇行した。
→ 暖かい空気に覆われた。
- ② ①の東シナ海付近の上層の高気圧性循環偏差の影響（順圧的）とともに、2月を中心にエルニーニョ現象に伴うインドネシア付近の対流不活発による影響により、フィリピン付近～日本の南において、下層では高気圧性循環偏差となった。
→ 沖縄・奄美付近に暖かく湿った空気をもたらした。
- ③ カムチャッカ半島付近において、上層の極うずが明瞭となり、下層ではアリューシャン低気圧が平年と比べて北西寄りとなった。成層圏突然昇温との関係も考えられる。
- ④ シベリア高気圧の東への張り出しは弱かった。特に南東への張り出しの弱いことについては、①の東シナ海付近の上層の高気圧性循環偏差の影響（順圧的）が考えられる。
→ 南ほど冬型が弱く、寒気の影響を受けにくかった。北日本では、気圧配置としては冬型が明瞭な場合も、大陸の寒気の強弱により寒気の影響を受けやすい/受けにくい時期があった。